

典礼と信心

英知大学 小田武彦

「教会の法規と規準に沿うものであれば、キリストを信ずる民の信心行事は、大いに勧められる」¹⁾

教皇ヨハネ・パウロ二世『典礼憲章』に明らかに記されているように、教会生活の頂点である典礼を、うわべだけの感覚的な現実決して縮小してはなりません。典礼は、教会生活の中心であって、ほかの宗教表現のどのような形のものであっても、代わりをしたり、同等のものと考えたりすることはできません。民間信心は、ある環境の中で生きている人々の感性において解釈できる特別な環境独自の文化的要素を持った信仰表現です。民間信心は、カトリック教義に相反する諸要素によって墮落したときによく現れるものです。しかし根本的な墮落に対して緊急を要する場合を除いて、責任ある人々と緊密な関係を持ち、注意深く信仰を養成することによって、忍耐よく賢明に清めていかなければなりません。²⁾

I 典礼とは³⁾

ラテン語の *liturgia*、英語の *liturgy* とは、神の民である教会が神にささげる公の礼拝、神への奉仕の行為である。この公の礼拝において、信徒も司祭も一緒に、イエス・キリストによる救いの現実に共にあずかり、信仰を宣言し、神に対する賛美と感謝、祈りを共にささげる。具体的には、「典礼暦」に従ってささげられる感謝の祭儀（ミサ）や洗礼式などの秘跡、葬儀のような準秘跡、一緒にささげられる「教会の祈り」などを指している。

【神の民の公的な神奉仕】 信者共同体全体が、神奉仕の主体（祭司・奉仕者）である⁴⁾。典礼が公的なものであるというのは、神の民における祭司職の秩序（位階制）に従って、お互いの奉仕を通して行われる神への奉仕だからである⁵⁾。すべてのキリスト者は、キリストの死と復活にあずかる洗礼を通してこの奉仕のための使命を与えられている。

【救いの秘義】 典礼において祝われるのは、神がイエス・キリストによって全人類に対して実現してくださった救いの出来事である。その根源にあるのは、キリストが全人類の贖いのために自らを父である神に奉獻なさった出来事である⁶⁾。神が人間を聖なるものとなさる歩みと、それに対して、恵みを受け入れたキリスト者共同体が応答していく歩みとが一つになって実現するのが典礼である。

【キリストの現存、三位一体的現実】 感謝の祭儀は、キリストの現存に支えられて、キリストの奉獻に結ばれる教会による奉獻である。キリストは、司式司祭、聖体、聖書朗読、祈り、歌にお

¹⁾ 『典礼憲章』13項。

²⁾ *The address of His Holiness Pope John Paul II to the Plenary Meeting of The Congregation for Divine Worship and the Discipline of the Sacraments (21 September 2001).*

³⁾ 『新カトリック大事典』「典礼」1-4項に表現上の若干の工夫を加えて引用紹介する。

⁴⁾ 『典礼憲章』7項参照。

⁵⁾ 同26-29項参照。

⁶⁾ 同6項参照。

いて現存される⁷。神のことばはキリストを通して告げられ、信者の祈りはキリストを通して父なる神にささげられる。キリストの現存において、神からの行為と人間からの行為は一つに結びつけられる。

歴史のうちに実現した救いの秘義を祝う典礼は、神の三位一体の秘義のうちに営まれる。神の子キリストのことばの分かち合いとその体にあずかる交わりは、父と子と聖霊の交わりの世界において展開する。三位一体のうちに全教会の一致の源があり、この一致は各共同体の典礼集会において示される。典礼の祈りは三位一体の神への賛美として聖霊に促されながらささげられる。典礼による賛美・感謝・奉献・祈願はすべて、常に父である神に向けられている。典礼は、三位一体の神のいのちが教会共同体を通して明らかに表される公の出来事である。

【終末論的性格】 典礼は、歴史のなかで実現した救いの出来事の記念であると同時に、今、現在における神の恵みの現存である。さらに、終末において完成される神の国の祝宴を現実の世界において不完全ながらも先取りし、これを指し示す行為でもある⁸。「主の死を思い、復活をたたえよう、主が来られるまで」という宣言（1コリ 11:26 参照）が示すように、神の民の典礼は、主が再び来られるまで、教会の「時」を証しし、すべてがキリストのもとに集められ、一つになる「時」を待望する祈りである。したがって典礼暦は、キリスト者の生活を終末の完成に向かうものとして形成している重要なものである⁹。

II 「民間信心と典礼についての規程—原則と指針—」 典礼秘跡省（2002年）¹⁰

（1）（教皇庁とりわけ典礼秘跡省の危慎） 第2バチカン公会議の教えに従って、「教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出てくる泉である¹¹」 典礼を発展させ推進して行くために、教会の中で信者の生活をキリストのいのちに一致させようとしているキリストの民の信心の諸形態を軽視してはならない。

- ・ 過去のさまざまな信心をあからさまに性急に捨て去る傾向がある。
- ・ 不完全で間違った信心への執着が根強い。
- ・ 信仰の純化という大義名分のもとに、素朴な民間信心を不当に批判する。
- ・ ある特定の時代と場所における信者の深い宗教性の表現として、民間信心を保護する。
- ・ 曖昧さを浄化する必要性和シンクレティズム（宗教混交）を排除する必要性とのディレンマ。
- ・ 実利的技術文明や経済的功利主義に対する低抗による民間信心の再活性化。
- ・ 民間信心への興味の減退による世俗化のイデオロギーや新興宗教台頭の助長。

⁷ 同 7 項参照。

⁸ 同 8 項参照。

⁹ 同 102 項参照。

¹⁰ Congregation for Divine Worship and the Discipline of the Sacraments, *Directory on Popular Piety and the Liturgy: Principles and Guidelines* (2002, Libreria Editrice Vaticana), Pauline Books & Media を、2005 年度全国典礼担当者会議における白浜満師の要約を利用して紹介する。II からIVにかけての各段落冒頭の数字は「民間信心と典礼についての規程—原則と指針—」の通し番号である。

¹¹ 『典礼憲章』10 項。

(2) (典礼と民間信心の関係についての教会の教え) 「**教会の法規と基準に沿うものであれば、キリストを信じる民の信心行事は、大いに勧められる。**特に使徒座の指令によって行われる場合はそうである。また部分教会の聖なる行事も、司教の指令のもとに合法的に認可された書物または慣習によって行われる場合、特に尊重されるべきである。しかしこれらの行事は、**典礼季節を考慮して規整されるべきであって、典礼に合い、なんらかの意味で典礼に由来し、また信徒を典礼に導くものでなければならない¹²⁾。**

「民間信心が無視されたり、冷淡な取り扱いを受けたり、軽蔑されたりしてはならない。なぜなら、民間信心は豊かな価値をもつものであり、それ自体が神に対する人間の深い宗教性の表れだからである。しかし、民間信心を息吹かせる信仰が、常によく吟味された真正な行為によって表されるよう、**民間信心は絶えず福音化されなければならない。**キリストの民の信心儀礼は、他の信心業の形態と同じように受け入れられ勧められなければならないが、**決して典礼祭儀の代わりをするものではなく、典礼祭儀と混同してはならない。**真正な典礼司牧は、民間信心の豊かさに支えられ、それを清め、典礼の方へ導き、神の民のささげものとしていかなければならない。¹³⁾

(7) 「信心儀礼」— Pious Exercise 典礼には属さないが、典礼の精神、法規、リズムに調和していると考えられるキリスト教信心の公的あるいは個人的な表現。典礼からある種のインスピレーションを受けて出てきたものであり、また典礼に導く可能性がある。多くの場合、啓示に由来し、教会的な背景がある。キリストを通して神が啓示された恵みに目を向けている。信心儀礼は、教会の掟と法規に合致するものでなければならず、慣習あるいは正式に認可された書物にしたがって実施される。

(8) 「信心業」— Devotions 信仰によって人間の内面で駆り立てられ、それが外的な行為となって表れたものを信心業と呼ぶ。たとえば、特別な祈りや歌、特定の時間の遵守、特定の場所の訪問、特別なスカプラリオやメダイを身につけることなど。

(9) 「民間信心」— Popular Piety キリスト教の信仰の範囲内で、個人的あるいは共同体的な性格をもつ多様な宗教的現象のこと。ある民族の特性、その文化固有の様相や影響が色濃く示される。

(10) 「民間信仰」— Popular Religiosity 万人に共通な体験に基づく宗教性を表現したもの。どの民族の文化の中にも見られる、ある種の宗教的な次元や体験を表す用語。民間信仰は、キリスト教の啓示に必ずしも起因するわけではない。

【諸原則】

(11) (典礼の優位性) 「**典礼行事は、すべて、卓越した聖なる行為であって、その効果においては、教会の他のいかなる活動も、同等の理由や程度で、これに匹敵するものではない¹⁴⁾。**

キリストと一致して生きるために秘跡は必要不可欠であるが、民間信心は任意である。主日のミサに参加することは掟であり、重要で尊いものである。それに対して、信心儀礼や信心業は、それが教会によって勧められたとしても、決して義務の対象にはならない。

¹²⁾ 『典礼憲章』13項。

¹³⁾ 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『典礼憲章公布25周年にあたって』。

¹⁴⁾ 『典礼憲章』7項。

(12) (評価と刷新) 信心儀礼が任意のものであるからといって無視したり、軽蔑したりしてもよいという意味ではない。あらゆるキリスト教的信心の尺度・規範は「福音」である。信心業の儀礼や実践の評価は、キリストの秘義との調和を目指して、それらの儀礼や実践を福音化する作業と一緒に行われなければならない。第2バチカン公会議が求めた典礼刷新は、信心儀礼や信心業の実践の評価と刷新を促すものでもあった。そのために民間信心は、聖書、典礼、エキュメニズム、そして人類学の各分野からのインスピレーションをもとにした評価と刷新を必要とし、各分野の要素を反映するものとなることが望まれている。

(13) (典礼と信心との区別と調和) 信心儀礼や信心業の実践と、典礼との間には、はっきりとした客観的な区別が示されなければならない。ミサや諸秘跡の中に民間信心の行為を取り入れたりして、信心儀礼と典礼祭儀を混同させるようなことをしてはならない。典礼祭儀の言葉遣い・調子・振る舞い等を、民間信心の行為において使用してはならない。信心業と典礼祭儀との間に対立を生じさせないように、祭日、主日、典礼季節や典礼日を常に優先しなければならない。

(21) (責任者と専門家) 民間信心の種々の表現形式は、教区司教の責任のもとに置かれている。教区司教は、民間信心の種々の表現形式が典礼祭儀の代わりをするものとなったり、あるいは典礼祭儀と混同されたりすることがないように注意しなければならない。教区司教はまた、公衆の面前でなされる民間信心の行為や実践に伴う祈りや式文を認可する権限をもっている。

聖職者であっても信徒であっても、グループとしても個人としても、教区司教の認可がない、祈りや式文などを公に使用してはならない。

Ⅲ 典礼と民間信心の歴史

(23) (キリスト教古代) 最初のキリスト者の共同体では、キリストだけが最も重要な崇拝すべき実体 (cultic realities) だった (コロサイ 2:16-17 参照)。そのキリストには、キリストのいのちを与えることば (ヨハネ 6:63 参照)、互いに愛し合えという命令 (ヨハネ 13:34 参照)、「わたしの記念としてこのように行いなさい」と命じられた典礼行為 (一コリント 11:24-26 参照) が伴っていた。

2世紀頃までに、ユダヤ教やギリシア・ローマ文化に起源がある民間信心の表現が典礼の中に入り込み始める。地域で大切にされるようになった殉教者崇拝は、死者の記憶と結ばれた民間の慣習の痕跡である。聖母マリアへの崇敬もまた民間信心によってもたらされたものである。

神の秘義を祝う荘厳な式にふさわしい、諸々の内的状況と必要条件に常に細心の注意を払いながら (一コリント 11:17-32)、教会は、個人や家庭、または共同体の信心から生まれたものを典礼祭儀の中に組み込んでいった。

キリスト教古代においては、典礼と民間信心が反発しあうようなことはなかった。ともにキリストの唯一の秘義を祝うということで調和し、超自然的な信仰と、主の弟子としての倫理的生活を支えていたからである。

(24) 4世紀になると、教会は新たな政治的社会的状態におかれ、典礼と民間信心の間のさまざまな問題が起こり始めた。もともとは偽りの神々や偽りの救い主に起因する祭儀的表現であって

も、キリスト、真の神、真の救い主への礼拝となりうるならば、真の祭儀表現になると考えられ、さまざまなものが典礼に持ち込まれた。

(25) 4世紀から5世紀になると、時と場所とに聖なる意味を付与し始める。多くの地方教会では、主の日や復活祭、断食（マルコ 2：18-22）に関する新約聖書の情報収集に加えて、特定の日をキリストの救いの秘義を祝う日と定め（公現祭、降誕祭、昇天祭）、殉教者を記念する日を *dies natalis* として祝いはじめた。聖なる秘義を祝うために共同体が呼び集められた場所の多くは、もともと異教礼拝か世俗的に使用されていたものを転用したものだだった。

(26) この時期に、さまざまな**典礼様式**が生まれてきている。とりわけ重要な首都座教会では、その地の文化や神学の伝統、霊性、社会状況から生れた民間の式文で主の礼拝を行なうようになった。この歩みは、独特の祭儀形式、テキストや儀式の集約と共に、典礼体系の格段の進歩をもたらした。他方、司教や地方司教団は礼拝方法を整えるための基準作成を始めた。彼らは、典礼文の教義的正当性と、その様式美に関して、また式文の配列にも、警戒するようになった。

(27) **教皇グレゴリウス一世**（590-604）の時代は、典礼と民間信心の豊かな関係を示す典型的な時代である。祈祷行列や祈りの場所、連祷の整備を通して、聖グレゴリウスは、重要な典礼改革を行なった。彼はその改革で、聖なる祭儀の基礎を確実に残しながらも、ローマの人々に民衆の感性を反映させた体系を与えようとした。聖人記念日などが増加する中で、聖グレゴリウスは、復活祭儀に中心を置くことによって、キリスト教の礼拝に一致の意識をもたらした。

（中世）

(29) 西方では、ケルト民族、西ゴート民族、アングロサクソン民族、フランス系ゲルマン民族がキリスト教と出会うことによって、5世紀までには新たな文化、政治制度や市民生活が形成された。

7世紀から15世紀の間に、典礼と民間信心の決定的な違いが徐々に明らかになっていった。典礼はラテン語で捧げられ、民間信心はそれぞれの地方の言葉で行われるようになっていったのである。

(30) このように典礼と民間信心とが別々に発展した理由：

- ・ 典礼は聖職者が行うものだと考えられ、信徒は典礼の観衆（見物人）になってしまった。
- ・ 聖職者、修道者、信徒といったキリスト教社会における役割の違いが明確になるにつれて、祈りのスタイルや形式も役割によって異なるようになっていった。
- ・ キリストの秘義のさまざまな局面に考察が加えられていくことによって、過越の秘義の中心性がぼやけ、反対に民間レベルでの祝い方や特別な祝い日が増えていった。
- ・ 信徒だけではなく多くの修道者や聖職者も、聖書についての十分な知識が欠けていたため、典礼の構造やしるしとしての象徴的言語が理解できなくなっていった。
- ・ 多くの奇跡物語や逸話を含んだ黙示文学の流行が、信徒の興味をかき立てるイコン文化に大きな影響を与えた。
- ・ しっかりと準備された説教が少なくなり、秘義について教えることもなく、信仰教育もほとんど

どなされなくなったために、信徒は典礼に積極的に参加するよりもカルト的な祝いや儀式に魅力を感じるようになっていった。

- ・ 典礼文や儀式の意味をおおげさなたとえ話で説明する風潮によって、信徒を典礼の真の本質から遠ざけてしまった。
- ・ 民衆から徐々に遠くなり、理解できなくなった典礼をもとにして、大衆的で表現豊かな様式や構造が現れた。

(31) 中世は、多くの霊的運動や団体が生まれ発展した時代でもあった。福音的使徒的生活を選び取った新しい修道会は、従来の修道生活よりも単純で分かりやすかった。また彼らは、大衆的な信心儀礼を民衆の中に広げていった。

独自の宗教的慈善的目的と専門的な関心を持った信徒団体である信心会 *Confraternities* の誕生は、ある種の民衆的典礼活動を生み出した。こうした信心会は、自分たちの宗教的ニーズに応えるために、礼拝堂を建て、自分たちの保護者を選び、その保護者を祝うようになっていった。メンバーが使うための「小聖務日課 *officia parva*」やその他の祈りを編纂することも珍しくはなかった。そうした祈祷書には、民間信心に由来する要素がたくさん含まれていた。

(32) 中世の時代に、民間信心のさまざまな形態が生まれ発展した。それらの多くは現代にまで続いている。

- ・ 典礼暦年の中で祝われる秘義を描く催し物、とりわけキリストの誕生、受難、死と復活といった救いの出来事にまつわる聖劇のようなものが生まれた。
- ・ 土着の言語による詩や歌が民間信心で広く使われることで、民間信心への参加が促進された。
- ・ 多くの典礼的表現と並行して、あるいはそれに代わるものとして、さまざまな信心業が生まれた。**ほとんど聖体拝領をしないことの穴埋めとして、さまざまな聖体賛美式の形態が生まれた。**中世後期には、詩編を祈ることの代用としてロザリオが使われ始めた。信徒の間では、**聖金曜日の本来の典礼の代わりに信心儀礼が行われるようになった。**
- ・ 聖母と聖人たちに対する信心業。聖地、使徒や殉教者のお墓への巡礼。死者のための執り成しの祈り（代祷）、連祷、遺物への崇敬がこの時代に発展した。
- ・ キリスト教への改宗以前からあった民間信仰や実践、本性的な感覚などに対応した祝福儀式の発展。
- ・ 大衆の実践に基づいた「聖時間」の核が形成される。それらはしばしば、典礼暦年のリズムのはざままで発生した。もともとは世俗的なものだった縁日、3日間 *tridua*、8日間 *octaves*、9日間 *novenas*、あるいは一ヶ月の祝いを特定の信心業のために使用するようになった。

(33) 中世における典礼と民間信心は、複雑にからみあった二重構造となっていた。典礼が民間信心のさまざまな表現を活気づけ養ってゆき、さまざまな民間信心は典礼の肩代わりとして発展したり、典礼の中に入り込んだりしていった。

このような二重性は、中世末期には大きな危機となった。礼拝形式の一貫性が崩れたことで、典礼における二次的な要素が、典礼の中心的要素に損害を与えるほど極端に絡み合ってしまったのだ。ふさわしい信仰教育が欠如していたために、民間信心における逸脱と誇張が、キリスト教礼拝の正しい表現を脅かすほどに大きくなってしまった。

(34) (近代) 近代になると、**典礼と民間信心とのバランスは完全に崩れてしまった**。15世紀後半に「近代的信心」(devotio moderna)が多くの有名な霊的指導者に好まれ、聖職者や教養ある信徒の間に広まっていった。それらの信心業は、おさなごイエス、イエスの隠れた生涯、受難と死の秘義といった、おもにイエスの人間性を基礎に、瞑想的で情緒的な信心儀礼を発展させた。しかし、観想に首位性が与えられ、主観が重視され、人間的努力によって霊的生活を深めたいと願う者にとって、**典礼はもはやキリスト教的生活の最重要の源であるとは考えられなくなった**。

(35) 『キリストに倣いて』は、「近代的信心」の典型的表現だと考えられ、キリスト者としての完成を求める人々に大きな影響を与えた。『キリストに倣いて』は、世俗から離れ、内なる先生の声に耳を傾けるよう強く勧め、個人的信心に向かわせた。**祈りの共同体性や教会的特徴、典礼の霊性にはほとんど注意が払われなかった**。「近代的信心」によって育てられた人々の間では、信心儀礼と同時に、カルト的な表現も数々生れた。それらの人々の間では、**典礼を捧げることに對する十分な理解が欠けていた**。

(36) 15世紀の終わりから16世紀始めにかけて、**アフリカ大陸、アメリカ大陸、極東地域が発見されたことにより**、典礼と民間信心の問題は、新たな意味を帯びはじめた。ローマ典礼から文化的にも宗教的にも離れた地域では、神のことばの説教や秘跡の挙行(マタイ28:19参照)とともに、**宣教師らが広めた信心儀礼によっても、福音宣教や信仰教育が行われたのである**。

信心儀礼は福音のメッセージを伝える手段となり、回心後はキリスト教信仰を維持する手段となった。ローマ典礼を保護するために整えられた規範によって、典礼とその土地固有の文化との間の相互影響はほとんどなかった。ところが民間信心の領域では、こうした諸文化との出会いがたやすく進んだ。

(38) 秘跡についてのカトリック教会の教え、教会の礼拝、民間信心に対して異議を唱えたプロテスタンティズムの広まりに直面して、**トレント公会議(1545-1563)**が召集された。公会議は、教義と崇敬の視点から典礼と民間信心の問題に取り組んだ。公会議が扱った問題の歴史的背景と教義的性格によって、会議に提出された典礼や秘跡の問題は主に教義的視点からのみ取り上げられた。間違いは弾劾され、誤用は有罪判決を受けたのに対し、教会の信仰と典礼の伝統は擁護された。「一般改革」教令(De reformatione generali)は、教皇庁と司教たちに活動の責任を持たせる司牧的プログラムを提案した。その内容は、民衆に対する典礼の指針から生じた問題への取り組みを示していた。

(39) この公会議と同質の司教会議が、多くの教会管区で開かれ、聖なる秘義の祭儀の挙行に、信者の行動的参加をもたらすことに関心を向けた。同時にローマ教皇は、**典礼刷新の膨大な計画に着手した**。**ローマ暦やローマ典礼の典礼書**は、1568年から1614年の比較的短期間に改訂された。1588年、ローマ教会における典礼の促進と、正確な指示を目的とした**典礼省が設立された**。

(40) トレント公会議での改革は、典礼に多くの利益をもたらした。比較的制限があった当時の時代の科学知識は間もなく制限を解かれたが、教会儀式の多くは「**教父の古い教え**」に回帰した。

典礼とは無関係の事柄や課題、また極端に民間的なものと結び付いたものは、除外された。典礼文の教義的内容は、信仰の純粋性を示されていることの保証が条件となった。ローマ典礼は、儀式的統一、気品、美を獲得した。

しかし、この改革は間接的には芳しくない様々な結果を招いた。典礼の本質ではなく、典礼を統制する典礼注記を基に形式が定められてしまったのだ。**典礼の活動的な主体は、まるで聖職者位階だけに限るかのようになってしまい、典礼と民間信心の間の溝をさらに大きくしてしまった。**

(41) 教義や倫理と教会制度の刷新の促進、プロテスタンティズム拡散の抑制、というカトリック側の改革は、ある意味でバロック時代の複合文化を示すものでもあった。この改革は、カトリック的な信心の文学的・芸術的・音楽的表現に多大な影響を与えた。

トレント公会議後の時代に、典礼と民間信心の関係は新たな局面を迎えた。民間信心がすさまじい勢いで発展していったのに対し、典礼は基本的に不動性を保つ静かな時代に入ってしまった。

信心儀礼は、カトリック信仰を守り、信者の信心を育む重要な役割があると見なされていた。主の受難の秘義、おとめマリアや聖人に献身する信心会が幾つも生れたことは、そのよい例である。こうした団体は大抵、贖罪行為、信徒の養成、慈善行為の3つを目的にしていた。民間信心のこうした形式が原形となり、信者の信仰や宗教的表現を育み続ける情緒溢れた美しい肖像が、数多く描かれた。

「大衆的宣教活動」(popular missions)はこの頃に誕生し、信心儀礼の拡大に大きく貢献した。典礼と民間信心は、しばしば多少均衡を失いながらも、こうした活動の中で共存していた。小教区宣教活動は、信者がゆるしの秘跡に近づき、聖体を拝領するよう促す試みを行なった。この宣教活動では、信心儀礼は、民衆を回心や礼拝行為に参加させる手段であると考えられた。

司牧的实践においては、信心儀礼の方が典礼よりもずっと重要視されるようになってしまった。このような状況は、聖書に対する知識や関心がなかったこと、全てのキリスト教礼拝の基礎であり頂点であるキリストの過越の秘義の重要性や主日における過越の重要な表現を十分に強調していなかったために起こってしまった。

(42) 啓蒙時代はさらに、潜在的には典礼に近い「教養ある人々の宗教」と、民間信心の方に近い「単純な人々の宗教」との分離を浮き彫りにしてしまった。「教養ある人々」は、民間信心を迷信や狂信だと考えて避け、知識や理性の啓蒙に基づいた宗教行為を奨励した。

文化の様々な側面に浸透していた貴族趣味は、典礼にも影響を与えていた。知識の百科辞典的雰囲気、批判的感覚と探求心と結び付き、典礼の起源を記した多くの書物が出版された。諸活動における禁欲的関心は、ヤンセニズムの影響を受け、また古代の純粋な典礼への回帰を求めている。特別な文化風土の影響に悩む典礼の刷新に対する思いは、特にフランスで17世紀以降いっそう熱くなった。

こうした司牧的関心が多くの地域にもたらされる中、教会は民間信心へと注意を向けた。典礼と民間信心の、ある程度の統合へ向けた教皇庁の動きが強まった。それゆえ、待降節や主日のような、典礼の重要時には積極的に説教や成人向けのカテケージスが行なわれた。このような説教は信者の心や倫理観の方向転換を目的としており、信者をゆるしの秘跡に向かわせ、日曜のミサにはきちんと参加する事、病者の塗油の秘跡の重要性を示そうとしていた。

プロテスタンティズムの影響を取り除くのに効果的だと考えられた民間信心は、教会内部の合

理主義による侵食と、ヤンセニズムによる不幸な結末への効果的な対抗手段となった。こうした働きと、広範囲に渡った小教区宣教活動によって民間信心は、補強され、豊かなものとなって現れた。民間信心は、イエスの御心や「初金曜日」のように新たに制定された「日」など、新しい手段でキリスト教秘義のある特別な側面を強調し、信者の信心の中で重要な役割を増した。

(43) カトリックの改革は、ローマ典礼の構造と一貫性を補強した。18世紀の宣教拡大で、改革は、福音のメッセージが伝えられた人々に、適切な典礼と統合ある構造を広めた。

18世紀における宣教地において、典礼はローマ的性格を持ち続け、土着の文化とは別物であり続けた。とりわけ、信仰に否定的な結果を招くのを恐れたため、福音の文化内開花は実際全く無かった。しかし、マテオ・リッチは中国的な典礼に取り組み、ロベルト・デ・ノビリはインド典礼実現のために奮闘した。

民間信心は、特に福音が深く根差していない地域で、宗教混合主義の危険に晒されていた一方、他方では民間信心はさらに自立的に円熟へと向かった。宣教師は信心業の再生産を制限せず、逆に土着文化の影響を受けた信心業の新たな形式が作られた。

(44) (現代) 典礼の復興は、教会を神の民・礼拝共同体として捉えなおす様々な教会論の発展から生じた。典礼的礼拝の復興の歴史においては、フランスで修道院制度を復活させ、ソレムの大修道院を創設したP. グランジュは特別な地位を占めている。彼が促した典礼刷新は、神の民全てが参加する礼拝の表現として典礼を整えることに大きく寄与した。

(45) 19世紀には、重大な歴史的現象が起きた。しばしば奇跡や出現といった不思議な出来事と結び付いた民衆による地方独自の礼拝形式が生まれた。徐々に正式な承認や、教会権威の庇護を受けるようになった地方独自の礼拝形式は、典礼のなかに入り込んだ。マリアにまつわる巡礼地、聖体の秘跡とゆるしの秘跡で有名な巡礼地、民間信心と結び付いたマリアの出現地、これらはすべてこうした現象を象徴している。

19世紀の民間信心と典礼の関係は、典礼刷新の背景や民間信心のさらなる増加に逆らっているようだが、他方でこの関係には、カトリック改革期に既に明白な現象であった、典礼行為の中で突出した民間信心の負の影響が及んでいた。

(46) 20世紀初め、教皇ピウス十世(1903-1914)は、典礼を人々に近づけようと、典礼の「大衆化」を提唱した。彼は信者が、「聖なる秘義に行動的に参加し、祭日の教会の公式祈願のような、(典礼の)第一義的必須な源」(37)で成る「真のキリスト教精神」とひとつになるよう主張した。教皇ピウス十世は、あらゆる信心業よりも典礼が優位にあることを明確にした。典礼と民間信心との間にあった混乱を取り除き、相違を明確にし、適切な関係が理解されるように努力した。

こうして、20世紀の教会に重要な影響を与えることとなった典礼運動が生れた。この典礼運動の最終目的は、**信者が聖なる秘義を知りそれを愛するようになること、そして聖なる秘義が聖職者だけのものになっていたのを信者全員に取り戻すこと**にあった。

教皇ピウス十二世は、典礼運動の指揮を取る中で、1947年11月21日に発布した回勅『メディアトル・デイ』で、過去数世紀の間に、ある程度カトリック信仰と同義性を獲得した信心業の擁護を訴えた。

最終的に、第2バチカン公会議の『典礼憲章』は、典礼と民間信心双方の正統性を強調しつつも、典礼の明確な優位性と、民間信心の典礼に対する従属性を明言することで、適切に典礼と民間信心の間の関係を定義付けた。

IV 現代的な諸問題

(48)歴史は何よりもまず、典礼における本質的な価値に対する信者の意識が薄らぐと、典礼と民間信心との関係も悪化したことを教えている。典礼の本質的な価値に対するゆがみの原因：

- ・ 主の過越の意味とその中心的な役割に対する意識の不足。そして典礼の挙行が主の過越の現在化であるという理解の不足。その結果、信者は、本当に大切なことよりも、キリストの生涯における小さなエピソードや、聖母マリア、天使、諸聖人に向けられてしまった。
- ・ 共通祭司職に対する意識の低下。信者ひとり一人が「イエス・キリストを通して神に喜ばれる霊的ないけにえをささげ」（一ペトロ 2：5、ロマ 12：1 参照）、それぞれの身分に応じて教会の礼拝に完全に参加しようとしなくなった。聖職者が典礼を独占し、典礼は聖職者だけが行なうものであるかのように考えられたため、信徒は、典礼に意識的に参加することよりも、信心業に興味をもつようになってしまった。
- ・ 典礼に固有な表現形式（言語、しるし、シンボル、儀式的動作）の理解不足。信者は典礼祭儀の深い意味がほとんど分からず、典礼行為は自分たちには無関係だと思ふようになり、自分たちにとってよく分かる言葉で行なわれる信心業に簡単に魅了されてしまった。

(49) さまざまな要因が絡み合いながら、典礼には不利益を、民間信心には質の低下をもたらしてきた。慎重に根気強い信仰養成によって正していかなねばならない。典礼刷新と信徒の典礼意識の改革によって、民間信心を典礼との関係性の中に据え直さねばならない。

(50)『典礼憲章』は、民間信心が典礼に従属するものであると同時に、民間信心は典礼へと導かれてはじめてその目的が全うされると教えている。従って、典礼が重要であるからといって民間信心を軽視したり、教会の礼拝生活のために有害なものであるかのように見なしてはならない。

(54)「祭司キリストとそのからだである教会のわざである典礼の行事は、すべて、卓越した聖なる行為であって、その効果においては、他のいかなる活動も、同等の理由や程度で、これに匹敵するものではない¹⁵」。

(55) 民間信心の儀礼は、イエス・キリストご自身の意図によって制定された典礼行為の本質的な要素と一致していない。御父のもとに栄光のうちに昇られた主は、御父のもとから聖霊を遣わし、とくに典礼祭儀を通して、御父の栄光とすべての人の救いのために働かれるのである。典礼は信仰の同意を必要とし、この信仰によって、信者はイエス・キリストの受難、死、復活（ロマ 6：2-6、一コリ 1！：23-26 参照）という救いの本質的な出来事の只中に組み込まれるのである。

教会は、人間のあがないのわざが、典礼、とくにエウカリスティアのいけにえによって実現さ

¹⁵ 同上。

れることを宣言しているが、それは他の信心の諸形態を排除することを意味するものではない。

(58) 典礼と民間信心は、領域を侵さない限り、キリスト教礼拝におけるふさわしい表現であり得る。しかし両者は、同価値なのではない。「(民間信心の)行事は、典礼季節を考慮して規整されるべきものであって、典礼に合い、なんらかの意味で典礼に由来し、また、信徒を典礼に導くものでなければならない。典礼は本質的に、これらの行事よりはるかにすぐれたものだからである¹⁶⁾」。

(59) (養成の重要性) 典礼と民間信心の間にある不均衡や緊張の原因を取り除くために、聖職者と信徒との両方の養成が必要である。「霊的生活は、聖なる典礼の参加だけに限られているのではない¹⁷⁾」。あらゆる次元において信者の霊的生活を向上させるためには、典礼的な養成だけでは不十分である。信者の霊的生活を、個人的な様式で開花させるためにも、カテケジスや教育の中に、民間信心の遺産、とくに教導職によって勧められている信心儀礼についての養成も組み入れることは重要である。

V まとめにかえて¹⁸⁾

【典礼を形づくるもの】 典礼の本質的な姿は、実際には、特定の社会的・文化的状況に置かれている教会共同体における神と人間との対話として具体化される。典礼集会における聖書朗読は神のことばの最も公的な告知であり、そのメッセージを信者に伝える説教や秘跡授与の定式句、奉献文におけるキリストのことば、祝福の言葉なども神のことばを示している。これに応える神の民の言葉は、公式祈願、共同祈願、連願、信仰宣言、種々の賛美の応唱、賛歌などで表現される。言葉だけではなく、しるしとなる儀式的な動作も典礼の不可欠な要素である。典礼における言葉は、実際には身体性を含む声であり、朗読、朗唱、歌唱、叫びとして表現される。他方、儀式や動作も常に意味をもった言葉である。さらに、典礼的な祈りの言葉は、時間のなかで典礼暦の展開に応じて、救いの秘義の豊かな側面を、照らし出していく。

【典礼と福音宣教】 典礼は、世界のなかに派遣された神の民の行為であり、各教会共同体が置かれている現実の社会的・文化的環境においてささげられる。典礼は、神の存在、恩恵、力、キリストによって実現した救いを証しする根本的な信仰宣言の行為であり、福音宣教の行為でもある。神の民は、自分たちに明らかにされた救いの秘義を、典礼を通してすべての人に告知させるために派遣されているのであり、教会生活とあらゆる使徒的活動は、典礼における神との交わりを原動力として、それに方向づけられていくものである。だからこそ、典礼は「教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る泉である¹⁹⁾」と定義づけられているのである。

典礼が教会の信仰の公的な告知の行為であるという性格から、典礼の祈りは常に教会の正しい信仰の表現であることが求められる。そのために、典礼書の公的承認や典礼法規の尊重が重要となっているのである。

¹⁶⁾ 同 13 項。

¹⁷⁾ 同 12 項。

¹⁸⁾ 『新カトリック大事典』「典礼」の 5 項と 6 項に表現上の若干の工夫を加えて紹介する。

¹⁹⁾ 『典礼憲章』10 項。